

旧満洲における新日本画のコード

—機械美・労働・科学技術のイメージを中心に—

Gina KIM

本研究は旧満州国で開かれた満州国美術展覧会（1938-1944）における日本画の傾向を調べ、昭和初期と戦時の美術界の連続性、そして満洲美術が持つ植民地性と独立性の両義性（アンビギュイティー）の観点から質す。

満州国美術展覧会（満展）は満州国の唯一の官設公募展として日中戦争の情勢の中で始め、太平洋戦争の時代を貫いて全八回開催された。満展は内地の新文展と朝鮮の鮮展及び台湾の府展を引き継いで、日帝の官展美術ネットワークを完成させたもので、東アジア近代美術史の発展において意味深い。しかし、現存する作品や資料の不在のため、学界研究の進行が遅れている上、ファシズムや戦時美術の一部として扱われてきたことも否定できない。

本研究では満展の第一部東洋画に注目し、1940年頃に頭角を現した在満日本人作家の（超）現実主義・写実主義・機械主義的日本画の傾向を在満作家のモダニズム認識と満州国コンテクストによって検討する。特に、機械美学の展開は同時の内地や植民地官展では非主流であったのに比べると、満展特有の様相を示している。整った空間の中に配置された機械や器物の現実的な描写、そして労働、建築、科学などのテーマはどのようにして満州日本画に移植されたのか。そして、どのような背景に基づいて制作されたかを検討してみたい。また、機械美はいわゆるアカデミック美術であった満展だけではなく、他の大衆メディア（ポスター、ハガキ、雑誌など）でも広く制作されたイメージであったのに基づいて、交差する満洲ビジュアルコードを議論したい。

ここで、本研究者は

1. 欧米やロシアの関連作品との比較
2. 昭和初年モダニズムと満州の新京都市イデオロギーのひとつの接点、もしくはコードスイッチとして機械美
3. 1930年代前半から内地の新進画家たちが結成した実験的新日本画との関係と影響
4. 日本ディアスポラの満州展覧会を中心としたライバル意識の論点から検討してみたい。